

話し合う楽しさを教室に

—— 中学校三年間における話し合いの学習指導を中心に ——

谷 木 由 利

はじめに

中学生という時期は、ともすれば自己を閉ざしてしまがちな時期ではあるが、一年生の段階のまだまだエネルギーが外に向かつて発散されている時期をとらえて、話し合うことの大切さを体験させ、中学校三年間を通して話し合う力を系統的に育てていきたいと考えたのが、二年四か月前のことである。

一 話し合いの学習指導を進める力

話し合いの学習指導を進めていく力、原動力とは何であるかを考えるとき、それはなんと話しても話し合う楽しさ、喜びを体験することだといえる。またその反対に、話し合いの学習指導を阻むもの、阻害する要因は何かと考えると、話す内容がなくて困ったこと、話し方がわからなかった、発表したが笑われ傷ついた場面などを思い浮かべるこ

とができる。

大村はま氏は、話し合いの学習への指導の準備として、
A 話し合うことのねうちを体験させる。

B 自分をも、人をも、大切にするとすることを身につける。

の、二点を挙げている。(注1)また、話し合いの学習において気をつけたいことを次のように述べている。

話し合いというのは失敗してはいけない。そうしないと頭のいい子どもの中に、一人で考えたほうがずっとよく考えられる、話し合うなんて面倒くさい、時間つぶしだなどと、考える子どもが出てくるかもしれません。ほんとうにくだらない話し合いは時間つぶし、なんにもありませんからこの子の言うとおりです。自分で考えたほうがよっぽど早い、こういうことになります。作文などは失敗しても、みんなに知られずすみませんが、話すこ

と声に出すことは失敗したら、もうあとには戻りません。長く心の傷になつて、なかなか消えません。

〔大村はま著「日本の教師に伝えたいこと」〕

一九九五年三月二十日、筑摩書房刊、八六頁

学習者の一人一人が、話し合いに参加して、おもしろかったな、よかったな、思えるような体験をさせることが、話し合うことのねうち、大切さにつながっていくと言える。一人一人の考えが違っていること、またそれを聞くことによつて自らの考えが深まっていく体験こそが、話し合う楽しさそのものである。民主主義の社会において話し合うことが何よりも基本となる理由も体験として学ばせたい。

そのためには、学習者の所属する学級や国語教室に、「自分を、人をも、大切にする」人間関係が必要になってくる。学級でも、グループでも、思いや考え感じとつたことなどを自由に気がねなく、発言し発表していく雰囲気を作り、自由に発言できる学級や集団を作っていくことが大切であろう。

話し合う楽しさを学習者一人一人のものとし、準備段階での指導も含めて話し合う力を育てていくためには、
1 心から聞き合う人間関係を育てる
2 話す内容を持たせる
3 話し合う中で、話し合いの仕方を身につけさせる
の三つに留意しながら、話し合いの学習指導を進めていきたいと考えた。

注1 野地潤家著「話しことは学習論」、昭和四九年二月一日、共
文社刊、二二〇ページより引用。

二 話し合い学習指導の進め方に関する省察

次に、一の話し合いの学習指導を進める力のところで述べた三つの観点、
1 心から聞き合う人間関係を育てる
2 話す内容を持たせる
3 話し合う中で、話し合いの仕方を身につけさせる
のそれぞれについて、この二年四カ月あまりの学習指導を振り返りつつ述べていきたい。

1 心から聞き合う人間関係を育てる

中学校入学当初、八十九名の学習者の間には、環境の変化に伴ういさかや感情の行き違いによるトラブルが茶飯事であった。自らの発することばが、相手の胸にどのような響くか、言いたいことが正確に伝わっているのかの意識が少ないためのトラブルであるように思えた。その一方で、友がどう思うだろうかと考えるあまり、言いたいことを言えずに毎日を通す生徒もいた。また、友のことばに過剰に反応して、寛容さを失い、暴力に訴えてしまうこともあった。その背景として、生徒たちの生活の中では、異質と思われる行為や言動が排除される傾向の強いことに気づいた。具体的に言うと、日常生活で興味を引くもの、好きなテレビ番組や音楽、スポーツなどは同じ傾向のものでな

くは仲間から排除される。生活の行動パターンも同じでなくてはならないし、服装や、もの考え方も少し違っているだけで仲間外れにされる傾向にあるといえる。異質なものの同士が、互いのよさに学び合つて初めて、集団で学習することに意義があるのであつて、一人一人の違いやよさを心から聞き合う人間関係を育てるために、国語教室では、次の二点を、さまざまな学習過程の中に位置づけたいと考えた。

① 一人一人のよさや違いを聞き取る

② 発表と発表を比べない

まず最初に①の「一人一人のよさや違いを聞き取る」については、一年の最初の単元「のはらうた」の朗読発表会から、徹底して続けてきたことである。教科書に載っている、あるいはプリントの、あるいは自分たちが作った詩を発表する詩の朗読を聞くとともに、決して他の班のあらさがしにならないよう、「よかつたところ」を中心に感想を述べ合いメモしていく活動を取り入れた。他の班の発表を聞く場合、短所はすぐ目につき、長所は二の次になりやすい。

「よかつたところ」を見つげるためには、いろいろの観点から、発表者の立場に立つて真剣に聞かざるを得ない。そのことが、結果として、静かによく聞く態度となつて現れ、発表者により発表しやすい雰囲気を作り出すことにもなつたように思う。

また、こうした発表の際に、二つ以上のグループや、二

人以上の発表者が続いてということになると、聞き手はどうしても、声の大きさや、わかりやすさ、内容などを比べる意識が働いてしまう。「よかつたところ」に目をつけているつもりでも、ついついどちらがうまい、下手の意識が働いてしまふ結果になる。そこで、②の「発表と発表を比べない」配慮が必要になる。「どちらが上手、どちらが下手」という意識から聞き手を解放し、「聞きほれる態度」という大村はま氏の提唱を實踐していきたいと考えていた。

話し合いの場がなごやかで、気後れや緊張感から解放されるのびのびと自分の考えが述べられる場となるようにするために、一年時において特にこうした配慮が求められるといえる。したがつて、話し合いの場だけではなく、友だちの発表を聞く場面（三分間スピーチ、「おいのり」の発表会など）では、この二点に特に注意を払つてきたつもりである。

二年生になつたときには、友だちの発表を聞くとときには、「よかつたところ」に注目することが、ごく自然な習慣になつていたように思う。しかし、「よさ」を聞き取るだけでは、話し合いの楽しさやほんとうの意味での話し合うことのねうちが気づくまでにはいられない。話し合いの醍醐味は、自分一人では思いつかない考えやものの方に出会えるというところにある。そこで、二年の最初の単元では、「一人一人の考え方の違い」に注目させ、「違い」を大切にすることを育てたいと考えた。教科書教材「春の郊外電車」

の感想を述べ合う中で、一人一人の感想の違いが浮き立つように、メモの取り方を練習した。この段階で、三十人全員の感想や着眼点が、それぞれ微妙に違っていること、話し合いによってそれを確かめ合うことの楽しさに少しずつ気づき始めてきたように思う。このあと、単元「わたしの仕事」の発表などを通し、九月には、初めての本格的な話し合いの単元「世界子供フォーラム」を実施することができた。この単元では全員がそれぞれ調べてきた世界の国々の学校の様子について話し合うという座談会の形としたので、一時間の話し合いで四、五人の発表が続くことがあったが、それぞれの国の学校制度の違いが、それぞれの発表者のゆるぎない存在価値となったので、聞くものは、「この国はどうだろう。」「この点はどうなっているのだろう。」という知りたい気持ちに促され、優劣を比較する気持ちがあつた。つまり忘れ去られていたように思う。活発な意見交換と

言うまでにはいならなかったがゆつくりと落ちついた話し合いの雰囲気になり、指導者にとつても、学習者にとつても話し合いに対する認識を新たにさせられた単元になったように思う。一人一人がかけがえのない位置を持って、その集団の中で機能するとき、自ずと互いのよさや違いを心から聞き合い、高め合う人間関係が生じるのだと痛感した。

2 話す内容を持たせる

学習者にとって、話し合いがたらく重苦しいものとなる

原因は、なんとと言っても話す内容を持たない場合であろう。話し合いに積極的に参加し、意見を述べない場合があつたとしても、乗り出すような気持ちで聞くことのできる話し合いにするためには、事前に学習者一人一人に話すべき内容を持たせる指導が必要になつてくる。

一年生のごく初期の段階でいえば、「のはらうた」の朗読発表会のための話し合いのように、どの詩を取り上げるか、だれが読むのか、読み方の工夫は、発表会の役割分担は、というようにさしあたり決めておかなくてはいけないことがたくさんある場合には、自然に活発な話し合いが行われることになる。一年三学期の「自分たちの新聞をつくらう」という単元のグループでの話し合いも、その延長線上にある話し合いで、新聞をつくるための取材や編集の細かな役割分担を決めるには、どうしても必要な話し合いである。一年の時の最後に「最も印象に残った単元は」と尋ねたとき、この「新聞づくり」の単元を挙げたものが圧倒的に多数をしめた。理由は、「新聞をつくるために班でいろいろ相談し、話し合ったのがとても楽しかったから。」というものが大半であった。

また、この他、話す内容を持たせるために、「読むこと」「調べること」と関連して話し合いの学習を進める場を設けた。一年二学期の段階でいえば、単元「どう思うへすつびん徳島」自分の考えを伝えよう」のように、徳島新聞紙上で読者の論争を巻き起こし十一種類の記事を取り上げ、

それぞれの気づきや意見をカードに書くことから始めた。最終的には、さまざまな読者の意見と友だちの意見を取り入れ、自分の考えをまとめて発表することにした。

二年生の単元「わたしの仕事」や「世界子どもフォーラム」は、自分の担当した職業や国について資料を読み、調べることによって話す内容を持たせようとした単元である。こうした単元では、一つの職業、一つの国を、一人の学習者が担当する形を取ったので、他の学習者が知らない情報を持つているという意味において、一人一人の発言や発表が重要な位置づけを得ることができ、発表する意欲や楽しさにつながっていったように思う。

その意味では、三年の最初の単元「出会いについて考えるーシンポジウム」もまた、出会いという一人一人の体験が話し合いの核となるので、どの学習者にも、自分の体験と比較しながら話し合いに参加するという姿勢が確保できたとように思う。

以上のような実践を通して、話し合いの学習指導において話す内容を持たせるための指導として、

① どうしても話し合って決めなくてはならない話題を持たせる

② 読むこと・調べることと関連させて学習者に独自の発表内容を持たせる

の二つの点から述べてきたが、この他にも、実践を重ね工夫を重ねて、学習者一人一人に話す内容を持たせる方法を

模索していきたいと考えている。

3 話し合う中で、話し合いの仕方を身につけさせる

話し方がわからなくて、話し合いが楽しいはずはない。

話したいことがあって、自由に自分の思いを述べることでできて初めて話し合いは楽しくなる。話し合いの学習指導は、話しことばの特質を理解し、その機能を十分に生かしたものではならない。書きことばは、その時点で記録され残されていくが、話しことばは、その場の一回限りで消えていく運命にある。従って、話しことばの指導は、書きことばの指導と違って、ことばの発せられるその場をとらえて指導されなくてはならず、時間をへたあとで再び指導を加えることは（特別な場合をのぞいて）不可能である。

そこで、話し合いの学習指導は、話し合いの中で、話し合いの仕方を基礎から系統的に、段階的に身につけさせる以外に方法はない。一年最初の単元では、「のはらうた」の朗読発表のための話し合いを行ったが、ここではまず、話し合いでの司会者や班員の発言を劇の台本の形にした、△話し合いの手引き▽を繰り返し繰り返し朗読することから始めた。「では始めます。よろしくお願いします。」から始まる台本を役をかわりあって何度も読むうちに、司会者の言うべきことや賛成、反対意見の述べ方やタイミンなどを学べるようにした。こうした「手引き」の工夫は、話し合いの学習のいろいろな場面で必要だといえる。

さらに、話し合いの基礎訓練としては、まずとなりの生徒と話し合い、二人の意見の同じ点、違う点をとらえ、まとめた形で発表することだろう。一年生の「どう思うへすっぴん徳島」の単元や、二年最初の「考え方の違いを大切にする」の単元で繰り返し練習した。基礎の訓練であるからには、やはり繰り返し返すことが必要で、一つの単元の一回限りの学習では、十分な成果は得られないように感じた。またここでも、二人の意見をまとめて述べるため「手引き」をつかって、二人の意見の共通・相違点を細かくとらえられるようにした。

その後の、一年「自分たちの新聞をつくろう」の単元、二年「古典新聞をつくろう」の単元では、三から四人で話し合い、まとめていく基礎訓練とした。学級単位の本格的な話し合いに取り組んだのは、単元「世界の子どもフォーラム」が最初であった。この単元では、自分で調べ知り得た情報を発表しやすい形にまとめておく必要があるが、ここでも入発表のための手引きVを用いた。三年では最初の単元「出会いについて考える」で、シンポジウムを経験し、二期にはディベートに取り組みたいと考えている。

話し合いの学習指導においては、意見発表や質問など話すことの指導とともに聞くことの指導がたいへん重要になってくる。話し手の立場に立つて聞く指導とともに、絶えず自分の考えと比較ながら聞くことが大切だといえる。そのためには、自分自身の気づきを交えて相手の言いたい

ことをメモできるようにしておかなければならない。二年最初の「考え方の違いを大切にする」の単元では、黒板と一緒にメモを取りながら、話し合いを進めた。その後の単元「世界の子どもフォーラム」ではかなり上手にメモできるようにになり、そのことが話し合いによって考えを深めていく楽しさに目覚めるきっかけになったようにも思う。またこのことから、指導者自身が、適切な場面をとらえて、その場で範を示していくことの大切さに気づかされた。機会をとらえて適切な指導をするためには、指導者自身の自己訓練が必要になってくる。

「話し合いの中で、話し合いの仕方をつきさせる」ためには、①基礎訓練から段階を追って ②入手引きVの工夫を重ねつつ、③聞く側の指導も大切にしながら ④指導者自身が模範を示していきたいと考えている。

まだまだ指導のいたらない面を多く残した、二年四カ月ではあったが、学習者は少しずつ確実に話し合うことの楽しさに気づき始めたように思える。単元「出会いについて考える」シンポジウムの学習のまとめのなかに、Bは次のように書いた。

シンポジウムに参加してみてもわたしは、話し合うって言うことは、本当にすばらしいことだと思った。最初は少し緊張してたけど、みんなが静かに聞いてくれて、自分で発言することの大事さを知った。だからこれからは、どんな

ん発言したいと思っています。

この意見に励まされてつつも、一方でこの日、全くシンポジウムに意欲を示さなかったCの表情もここに刻んで、指導の工夫とわたし自身の自己習練を重ねていきたいと考えている。

三 単元「出会いについて考える」(三年生)の場合

1 単元名 単元「出会いについて考える」

——シンポジウム——

2 対象 徳島県板野郡吉野町立吉野中学校 三年生

3 実施期間 平成七(一九九五)年 四月～五月

4 単元設定の理由

情報化、国際化、価値観の多様化する社会の中にあつて、一人一人の考えを大切にし、またその違いを認めあうことが大切になってくる。また、互いに考えを述べあうことによって、さらに考えが深まっていく経験を持ち、話し合う楽しさを味わうことは、義務教育を終えようとする中学三年生にとってどうしても必要な学習体験であるといえる。友や先生との新しい出会いがあるこの時期、「出会い」を

テーマに書かれたさまざまな文章を読み、そこから得られた情報をもとに、自らのものの見方や考え方を広くすると、また、さらに自分自身の出会いの経験にもとづきながら自己の考えを発表し合う場をつくりたいと考えた。だれもが経験する「出会い」であればこそ、一人一人の「出会い」に関する考えが広がり深まっていくはずである。

シンポジウムという形態の話し合いは、テーマに関する考えやもの見方を広げ深めるのにふさわしい形態であると考えた。この機会にシンポジウムにおける話し合いの仕方にも身につけさせたい。

5 単元目標

- ① 新学期が始まるにあたって、学習の仕方を工夫したり、よりよい学習態度を示そうとする意欲を育てる。
- ② 話し合いに参加することは自己の世界が広がることとしてとらえ、そこに喜びが見いだせる態度を育てる。
- ③ 話し合いを通して、支え合い高めあう人間関係を育てる。
- ④ おもに次のような言語能力を育成する。

ア 読む

・場面展開や描写から登場人物の人物像をとらえることができる。

イ 書く

・読んだ時の気づきをまじえながら、カードに整理して

書くことができる。

- ・ 主題を生かすための関連した材料を集め選んで書ける。
- ・ 発表するために、考えを整理して書くことができる。
- ウ 話す

- ・ シンポジウムにおいて提案発表ができる。
- ・ シンポジウムにおいて質問をし、意見を述べることができる。

- ・ 根拠を明らかにして効果を確かめながら話すことができる。

エ 聞く

- ・ 話し手の言いたいことや根拠を的確にとらえることができる。
- ・ 自分の考えと比較しながら聞き、自らの考えを深めることができる。

オ 言語事項

- ・ ことばの持つテーマ性、象徴性に気づき、イメージを広げることができる。
- ・ 提案発表にふさわしいことばのつかいかたを知る。

6 教材

- ① 教科書教材 「出会い」 大林宣彦 「握手」 井上ひさし
- 「発表と話し合い」 「出会いを生かす」

〔国語 3〕 光村図書

- ② 「話し合うっていうことは」「こんな言葉を使ったら」

「パネルディスカッション」「シンポジウム」

- （鶴田洋子著）話し合ってみようよ 一九九二・四、さ・え・ら書房刊より抜粋

- ③ 学習の手引き 1・シンポジウム発表の手引き・話し合いメモ

7 学習指導計画（十時間）

- 〈第一次〉 今年度の学習目標を立てる。「出会い」についての指導者の話を聞き、学習計画を立てる。

……………一時間

- 〈第二次〉 教科書教材「出会い」を読んで、筆者の「出会い」に関する考えや見方を知る。

教科書教材「握手」を読んで、気づきをカードに整理し、発表する。……………四時間

- 〈第三次〉 シンポジウムに参加するにあたって知っておかなくてはならないことの説明を聞く。

教科書教材「出会いを生かす」を参考にしながらシンポジウム発表のための材料を集め、発表原稿を書く。……………三時間

- 〈第四次〉 シンポジウムを開く。……………一時間
- 〈第五次〉 学習記録を整理し、学習のまとめをする。……………一時間

8 学習指導の実際 — シンポジウムを中心に —

「学習の積み重ねを大切にすることばで人間関係をつくる」を目標に今年度の授業のスタートをきった。第二次の「出会い」「握手」を読んでカードを取る作業、第三次の発表原稿を書く作業では、個別指導を行った。さて、いよいよ、シンポジウムという段階になったが、そこまでの作業を通して不安に思うことが一つあった。話し合いのテーマは、もちろん「出会い」であるが、一個人の経験においても一つ一つの出会いがそれぞれ違った意味を持っており、「出会い」とは何か、と聞かれると答えに困ってしまう、たくさんさんの出会いがあるのはわかったが、それでどうなんだと聞かれると返答に困ってしまう要素があるのではということだった。

学習者の発表原稿を見ると、人や動物との出会い、本との出会い、スポーツとの出会いといったふうに実にさまざまなおまな出会いが書かれており、したがって出会いの意味づけもまた実にさまざまだった。確かに考えやもの見方を広げるという意味では、成功するかもしれないが、深めるということではできないかもしれないという思いが強くなり、話し合いの原稿をつくるという作業まででこの単元を切り上げようとさえ考えた。

しかし、学習者はシンポジウムというまだ経験したことのない話し合いに対して期待と関心を寄せており、シンポジウムを実施した。さまざまな出会いを経験した七人を提

案発表者を選び、指導者の司会で、シンポジウムを行った。発表者以外の学習者は、七人の発表を、落ちついた温かい雰囲気の中で聞くことができた。発表者の発表が終わって、質問や意見交換がおこなわれたが、この中で、フロア側からも小学校時代の先生との出会いによって、自分の性格が大きく変わったという発表があり、参加者全員が感銘を覚える話し合いになった。わたし自身も、この意見交換を通して、先の心配に反し、話し合いを実施してよかったという思いを強くした。

学習者は、話し合いに参加しての感想を次のように書いた。

・ 七人それぞれに大切な出会いがあり、それによって自分も変えられたというのは本当にすばらしいことだと思つた。何にでも自分から心を開いて素直な心を持つことで、わたしもだれかをそんなふうに変えていければうれしいと思つた。わたしも自分自身の出会いを大切に、自分も変わっていきけるようにしていきたいと思う。

・ シンポジウムに参加して、七人の出会いを聞いてみると「ああ、あれも出会いだったんだなあ」といろいろな出会いが、浮かんできた。こうして思い出してみると、わたしは知らない間にたくさんさんの出会いをしてきたのだと思つた。この七人はとてもすばらしい出会いをしてきたのだ。そして、わたしも。出会いとは知らぬ間に過ぎていくことが多い。そして、後から、「ああ、あれも出

会いだ」と思うことが多いとわたしは思う。
それぞれがそれぞれの「出会い」の意味を確認できた一
時間になったと思う。

9 評価について

- ・場面展開や描写から登場人物の人物像をとらえることができたか。(学習記録、作業を通して)
- ・主題を生かすための関連した材料を集め選んで書けたか。(学習記録、作業を通して)
- ・話し手のいいことや根拠を的確にとらえることができたか。(学習記録、話し合いを通して)
- ・学習の仕方を工夫したり、よりよい学習態度を示そうとしているか。(話し合い、日常生活を通して)
- ・話し合いを通してよりよい人間関係を気づこうとしているか。(話し合い、日常生活を通して)

おわりに

将来、学習者がどのような進路に進むとしても、話し合うという場面をさけては通れないだろう。そうした機会に進んで準備し、意欲的に話し合いに参加できる人であってほしい。卒業まで、あと七カ月というわずかな期間ではあるが、心から「話し合うことは楽しい。」といえる場面を数多く設けたいと考えている。

また、いうまでもないことではあるが、話し合いを指導

するためには、私自身が話し合うことを心から楽しみ、同時に、話し合うことの技術を身につけるべく、いろいろな機会をとらえて、習練を積み重ねておこなうてはならない。私にとって「話し合うことが楽しい」と思えたのは、大学院でのゼミを通じてであった。ゼミのための下調べをし、どのような考えを述べても温かく受けとめてくださる先生方や仲間にも恵まれたことがその要因であると思える。

現在、吉野中学校では、生徒会による話し合いが活発におこなわれている。これは、二年前に、頭髮自由化問題が起こったときに、生徒自身が徹底的に話し合うことにより、問題の解決を図ったことがきっかけになっている。今年の生徒会のテーマも、「なんでも話せる生徒会」である。この夏休みにも、各市町村から中学生の代表が集まっていじめ問題について話し合う「いじめサミット」がひらかれた。本校からも三年生数名が代表として参加したが、この代表者の中には真剣に話し方の指導をこうものが増えてきており、がんばってほしいという級友の支える声も強くなった。国語教師としてこうした生徒たちの、話し合いへの意欲・関心の高まりに答えるべく指導の工夫を重ねていきたい。

(徳島県吉野中学校教諭)

〔付記〕平成七年度の第三六回広島大学教育学部国語教育学会での

発表にあたっては、三年間の学習指導の概略、生徒の学習資料

も添えましたが、ここでは省略させていただきました。